

一声社：TEL03-3812-0281/FAX03-3812-0537

今日は何の日？ 7月25日

かき氷の日・・・夏氷＝な(7)つ(2)ご(5)おりの語呂合わせ。日本かき氷協会制定。

あぁ、男子寮—寮の食事・悲哀編①

男子寮では、朝食と夕食が出された。朝食は、ご飯と味噌汁+付け合わせ(海苔や納豆)。夕食は、一応ありがたい定食風？だった。

寮食の掟は、まず何よりも「早い者勝ち」という単純明快かつ弱肉強食のルールに則っていた。朝食の味噌汁は、早起きの者(徹夜で遊んでいるだけかもしれない)が大鍋の具をさらっていく。新1回生が食べに行く頃には、味噌汁はただの飲み物になっており、もはや元の具が何であったか不明である。

夕方には棚に並べられる夕食で「早い者勝ち」ルールを適用すると、どうなるだろう？ 講義のない(または出ていない)上回生や、バイトにいそしんでいないブラブラ男が断然有利である。

ヨネやん1回生冬のある日に起きた事件は、寮食のルールに内包された問題が、凝縮され噴出した事件であった。世にも恐ろしい、「おかずは、豆腐1丁だけ事件」である。

お世辞にも熱心とは言えない講義の後の連日のバイトで疲れ果て、寮食堂にたどりついたのは、夜の9時過ぎだった。「今日のおかずは何かな？」。好き嫌い等という贅沢を言っていたら、寮では生き抜いていけない。戸棚に入れてあるおかずを取った瞬間、ヨネやんは言った。「なに、これ？」

お皿の上にあるのは、お豆腐が1丁だけ(今あるようなミニパックではない)。夜の闇の中に光る、白く巨大な物体は、いやがうえにも存在感を増していた。他にあるべきおかずは、食堂内のどこにもない。

「まあ、しゃあない。ご飯は？」。ご飯の巨大ジャーを開けてみると、ほんのりと赤っぽい色が付いただけの何の変哲もないご飯。具が無いのに色づいているところが何やら不気味さを増しているのだが、

一瞬躊躇したもののすぐに食べ始める。ただ、嫌き嫌いは無いとはいえ、お豆腐だけを1丁丸丸食べるのは、中々骨が折れるものだ。しかも、「夏に冷奴」なら「奈良公園に鹿」と同じくらい相性が良いが、今は冬である。このメニューの真意を問いたい。

夕方から9時過ぎまで、冬のさなかに外気に触れ続け、十二分に冷え切ったお豆腐は、食べるごとにお腹を冷やしていく。半分くらい食べた時点で「こら、アカン。お腹の調子・・・」と思ったが、何とか1丁食べ切ることに執念を燃やしたのは、貴重なタンパク源だからである。

しかし、そうはいつでも、味の変化もなく、頼みのご飯も「謎の具なし色付き飯」となれば、ただの豆腐を1丁食べ切るのは、苦行である。吉野の大峰山で苦行を積む山伏達もかくやあらん。1丁食べ切ったその夜、やはりというか当然の帰結と言うべきか、ヨネやんのお腹は近鉄特急以上のスピードで下って行った(吉野行きは下りである)。

翌日、同じ目に遭った1回生の友人から、驚くべき事実を告げられた。

「ヨネ！ 昨日のご飯な、牡蠣が入ってたらしいでえ。バイトもしてない2回生のNらが、牡蠣を全部平らげてしもたんや。それで、俺らはただのご飯になってしもてん」

「くそお～！」と怒ろうにも、下腹に力が入らん。「牡蠣なし牡蠣ご飯もひどいけど、豆腐1丁はないやろ、なんぼなんでも。俺、あれでお腹壊したでえ」

「えっ？豆腐はええやん。栄養あるでえ」

「お前は、幸せもんやなあ」

しかし、後に体験する驚天動地の食事に比べれば、お豆腐はまだグルメだったのだ。

果たしてヨネやんは、男子寮を無事に卒業できるのか一次回、乞うご期待！